
学生生活に必要なツっ込み

なぎさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学生生活に必要なツツ込み

【Nコード】

N7070U

【作者名】

なぎさ

【あらすじ】

3人組制度とゆう、生徒が3人組になり自分の特技をいかして学校内で、ランキング形式になって戦う香蘭こうらん高校に入学した、田村苗木。苗木とともに、3人組を組んだ大石唾実おおいしあみ、那霧那柚子なぎりなゆしこの名前の漢字が難しい二人とめだたないように、過ごしていく。ギャグあり、バトルあり、クイズあり、ランキングあり?!のなんでもありの、学園もの小説!!

第一ポイント

第1ポイント

今日から花の高校生。

私がこれから3年間通う香蘭（こうらん）高校の校舎へと続く道の両脇には、

新入生を迎えるための桜が咲き誇っている。

別に花をめぐるほど雅（みやび）な人間ではないけども、その美しさには

一瞬目をうばわれてしまうほど。

でもそれも一瞬のこと、私の頭のなかにあるのは春の風物詩のことじゃない。

それは、香蘭高校の教育方法である。

この学校には6年前からいれられた3人組制度とゆう制度があり、それは生徒が3人組になりそれぞれの特性をいかし、イベントで勝ち抜く。

そして勝ったときに得られるポイントを校内、つまり1年から3年まで戦う。

このポイントはランキング形式で掲示板でかかっている。

ちなみにイベントとゆうのは、中間試験や、体育大会などであって個人で大会などを企画することもできる。また、勝負も挑むこともできる。

例えば、Aグループは点数が少ないためBグループに勝負を挑み勝つことが

できればBグループから一定（いってい）のポイントをもらうことができる。

第二ポイント（前書き）

書いてませんでした。この高校は女子校です。

こうゆうあどすげが多々あるかもしれませんがよろしくです。

ちなみにこの話の3人のコントは私の日常で毎日起きてる

ことを書いていたり、書いてなかったりします。

それを書いた私のブログがあるので、ヒマな人はぜひ

読んでやってください。 <http://ameblo.jp/naga>

g i - g a z e r u

第二ポイント

私「ってこれいつもの3人じゃん!!」

那柚子「えつとどちら様ですか?全然わからないんですが、」

私「何言ってるの?! 中学2年からずっと一緒にいたじゃん!

啞実「まあまあいいじゃん。この3人ならなんでもやりやすいし。」

私「あいもかわらず、楽観的ですねー!」

そう、この2人とは中学2年からの付き合いでそれからずっと一緒にいた

那「あつ今思い出した!確か田中さんだったよね?」

啞「今思い出したの?それはちよつとひどいよ、ね田中さん?」

私「田中さんって誰だよ!!てゆうか啞実もなのー!!」

那「ウソだよ。うそうそ!!ねーあつちゃん」

啞「そうだよ。忘れるわけじゃないじゃん、春休み会ってないからっ

て

那&啞「そう怒らないで、佐藤さん!」

私「だから、、、誰だよ!!」

てゆうかよくある苗字つぎるだろ。

こないつものネタはおいといて、そろそろこの子たちを説明しなきゃ

最初に発言した、那霧那柚子ちゃん 通称なゆ

なゆといきぴったりだった、大石亜美ちゃん 通称あみ

この名前の漢字が難しい2人が私に3人組の相手。

さっきから「私」ばかり言ってるわたしは、田村苗木。

それと私達にはひとりひとり、特技がある。
まあ特技がないとこの学校には普通、入れないんだけども。
ここでは、特技のことをスペクタリーと呼ぶ。

そのスペクタリーを武器にランキングを勝ち上がっていくんだ
けど、

私たち3人のスペクタリーを紹介しよう思う。

まずはなゆ。なゆのスペクタリーはゲーム。
なゆによると、小さい頃からいろんなジャンルのゲームしてきて
「ひきこもり」てっゆうとブチ切れるから「インドア派」と言う
らしい。

ちなみにこのスペクタリーは、「ゲーム」と名のつくもの、全て
入る
もちろんTVゲームやカードゲーム、ボードゲームからパズルま
で。

やったことのないゲームは1、2回やれば完璧にできるし本気を
出せば
大会にでて優勝することもできる。なんでやんないんだろ？

それで、私のスペクタリーは運動。
いままで会ったなかの女子には、誰にも負けていない。
これからも負けるつもりはないんだけどね。

私のスペクタリーも運動ならなんでもできる。
陸上、水泳、スポーツ、球技などなど。

最後はこのなかで最強のスペクタリーをもつあみ。
彼女のスペクタリーは、努力だ。

努力が特技とゆうのも変かもしれないが、特技なのでしょうがない最強とゆう理由はこのスペクタリーはなんでもはいるから。勉強、運動、ゲーム、楽器、料理、製造etc文字通り、なんでもはいる。

校長は学校始まって以来のスペクタリーと言っていた。だから3人組なんて組む必要はないんじゃないかと思うけど。

それに彼女のスペクタリーはなんでもはいるため、私たちのもはいつている。それが恐ろしくてたまらない。

私「あのさ、あみ。あみのスペクタリーは万能だから、私たちのスペクタリーの分野は努力しないで欲しいんですけど、」
唾「あー、そうだね。そうしないと、もしかしたら解散させられるかもしれないしね。それは絶対ヤだし、いいよ。」

那「助かるよー。私はじゃなきや「ボケ」てゆうスペクタリーにしなきやいけないかもだし。」

私「もうちよつと選択肢はあるでしょ?!?!」
じゃあ私のスペクタリーは「ツツコミ」になるのかな?

唾「それもそうだけど、そろそろ私たちのクラスに行ってみない?」

那「それもそうだね。どんなクラスなんだろうー。それにさ、もし担任の先生のキャラがすごかったらおもしろいよねー」

私「お前はわたしのツツコミの仕事を増やす気か?」

唾「まあまあでもそんな担任いないでしょ?」

あみ、それ以上言うとなんかのフラグが立つから、いわないで!!

那「でも、どんな人なんだろうねー」

私たちは屋上をでてこれから一年間過ごす教室に、向かうことにした。はたして、どんな担任がまってるのだから。

うか。

第三ポイント（前書き）

やっぱりこの高校は共学で、校舎ごとに男女別れてます。
ほんと勝手ですいません。

第三ポイント

那「そういえば、なゆのいとこって教師じゃなかったけ？」
私「よくそんな細かい情報覚えてるね。」

でも、どこの高校の教師だったかは知らないけど。
唾「もしかして、この高校の教師だったりして、、、。」
私「まさかー。それはさすがに、、、。」
唾「だよー。冗談ですから。」

唾実の冗談は、なんだかやな予感がするんだけど、、、。

教室についた。

那「まあ、小汚い教室だけど入って入って！」

私「お前は、どんな立場にいるんだよ!!」

ホラ、私たちが最後みたいだよ

唾実が扉を開けたそこにいたのは、、、。

馬島「おい、お前ら遅いぞ。早く席つけ。」

那&唾「中誠さん?!」

馬島「おー、お前らか。てゆうことは苗木もいんのか？」

わかった方もいるかもしれませんが、
唾実の冗談が当たってしまったのです。

そうなんです、私のいとこなんです。

私「ここの教師やってたの？」

馬「そうだよ。言っただけ。」

私「言われてないよ!!」

馬「じゃあ今言ったからいいだろ。」

私「よくあるヘリクツじゃん!!」

唾「ちよつと、なえぎ!!」

那「なんで、馬島さんがここにいんの？」

だつてここは、スペクターイーを持ってなきや
入れないんじゃないの?!

私「持つてるよ、、、。」

唾「なんのスペクターイー？」

私「嘘を見抜くの。」

那&唾「えっ?」

馬「嘘だけじゃないぞ。表情を読み取って、

感情までわかる。ちなみに、

今二人とも少しオレに嫌悪を抱いたろ?」

私「私が今まで、どれだけお正月に苦しんだか。」

那「まあ、来るよね。お正月にいとことかは
集まるもんね。」

馬「てゆうかお前ら、席につけて言ってるだろ!」

3人順に頭を叩かれた、、、。

しぶしぶ、席につく三人。

教壇にたった、馬島先生が

馬「オレの名前は馬島ましま 中誠ちゆうせい

今日から一年間、オレがお前らの担任だ。

さっきの三人とのやりとりを見てて分かったように

オレのスペクターイーは、感情を見抜くことができるから
なんでもお見通しだから、問題だけは起こすな!。

オレが働かなきゃならないからな。」

《それが教師のゆうことか……。》 生徒達の声

馬「ちなみに、オレの教科は理科だから
イヤそうな顔していると一時間ずつと当てるからな」

《こんな担任ヤダ……。》

馬「あっそうそう、来月中間テストがあんだけど。
この高校のテストは3人組の1人が受けることにな
っててだな、誰が受けるか紙に書いて
提出しとけよ。期限は、たぶん1週間後だと思っ
私「たぶんで、あいまいすぎるでしょ!」

馬「じゃあそうゆうことで。」

私「どうゆうことだよ!」

唾「そんなことより、誰がテスト受ける?
那&私「えっ?何言ってるの?頼んだよ!」
唾「なんでわたしなのっ!」

那「だって、元学年1位でしょ?」
私「それに、どうせ1位とれるでしょ?」

唾「まあやってあげてもいいけど。」
那「それにランキングのポイントにも入るんではよ?」
私「負けてられないね!」
那「絶対にいい点取ってやるぜ!」

唾「テスト受けるのは私なんだけど。」

さて、このテストどうなるのか？！
次回へ続きます。

第四ポイント

馬島先生のテキストなホームルームが終わり、
1時間目はまた馬島先生の授業。

馬「はい、これから、、、。」

《いちお教師だし、ちゃんと授業するのかな。》

馬「お前らに、自己紹介してもらおう。」

《へ？、、、。》

私「はいっ！せんせー。」

馬「はい、そこの変なこ。」

私「生徒に向かって変てゆうな！

で、先生授業しないんですか？」

馬「教えんのって、めんどくさいんだよ。」

《それが教師のゆうことかー！ー！》

馬「じゃあ出席番号順で、それとスペクタリーは

言うなよー。そっちのほうが後々おもしろそうたる。

あとは、オレ寝とくから。よろしく。」

私「（小声）ねえねえ。自己紹介でどんなことゆうの？」

那「（小声）んー、好きな新聞の種類とか？」

私「（小声）おじいちゃんか！」

唾「（小声）普通は、趣味とか好きなものとかじゃないの？」

那「（小声）あー、そっか。じゃあさ夢とかでもいいの？」

唾「（小声）いいと思うよ。」

那「（小声）「海賊王にオレはなる！」みたいなのも？」

私「ワンースじゃねーかー！」

できるだけ小声でしゃべっていたのに、なゆのせいで大きな声をだして、クラスの子みんなが驚いた顔をしてわたしを見る。

馬「おい。うるせーよ。成績さげるぞ」

私「勘弁してください。」

唾「ほとんど脅しだね。」

私たちが相談してる間にもどんどん自己紹介が、続いていて、次は唾実の番。

唾「（小声）次はわたしだからよく聞いててね」
こくんとうなずく私となゆ。

唾「大石唾実です。わたし達がランキング戦1位になるんで、せいぜい頑張ってください。」

みんなが、あ然している。

忘れていたけど、あみは筋かね入りの負けず嫌いだっただけ。それに、あまり人が好きじゃないから自分が認めた人以外は

敵意むき出し。わたしたちに最初にあつたときもそうだったけど、いつのまにかいつも一緒だったけど。

私「まったく参考にならなかったんだけど！」

唾「えー、そうかな？結構できてた気がするけど。」

私「みんなあ然してたけど!？」

ついになゆの番がきた。大丈夫かな？

那「えっと、那霧那袖子です。夢は、この世にある

ゲームを全てやることです。ゲームに関しては誰にも

負けないんで、よろしく。」

私「お前もかよっ!！」

はっ!ついにわたしの番がきてしまった。

しかも涼宮ハヒの席だから一番最後、、、。

馬「ほら、お前が最後だぞ。トリだな。」

プレッシャーをかけられた。

なにも浮かんでないのも見抜かれた。

ゆっくり立つと同時に、みんなが私を見る。

私「た、田村苗木です。ケ、ケンカ上等!

夜露死苦。」

なにを言ってるんだー!わたしはっ!

不良かつ私は!レディースかつ!

みんなの顔をゆっくり見ると。
わたしのことをよく知ってる、3人以外は全員下を
向いて机を一生懸命みていた。

私「あっ！えつと違ってます！今は昨日読んだ不良マンガ
の主人公が言ってたん言葉で、、、。」

おなじみにあの3人が必死に笑いをこらえてる。
ちよつと助けてよ！！

思う存分笑った馬島先生は
馬「じゃあみんなこれから仲良くするように。」

みんな顔が引きつってるよ、、、。

さて、私はこの先このクラスになじめるのでしょうか。
次回へ続く、、、。

第四ポイント（後書き）

とくに、かくことがありませんでした。

第五ポイント

あの事件以来、私達3人は恐れられてるらしい。

そりゃそうですねー。しよっぱなから「夜露死苦」て。

もう入学式前日に不良マンガは読まないようにしよ。

長かった授業も終わり、今はお昼休み。

私「あのさ、授業中に誰かにチラチラ見られてる

気がしてたんだけど。」

那「入学初日から人気者でいいじゃん。」

私「人気者でレベルじゃなかったよ?!」

唾「わたしなんて、ノートとってて人の目なんか

気にしてられなかったよ。」

那「でも、唾実なら絶対一位取れるでしょ?」

唾「でもなゆも、英語なら完璧なんだからさ。」

なゆは、帰国子女とゆうやつで、小学校3年からアメリカに行っていて中学からは日本に帰ってきたらしい。

だから、英語だけはとび抜けてよかった。

那「んー、でも他のはあんまりよくなかったから。」

私「おい、それはわたしへのイヤミか？」

那「なえのテストの解答は面白かったなあ。」

唾「みんな、見に来てたよね。」

私は真剣に書いてるんだけど、、、。

那「テストが終わることに、先生に呼び出されて

真面目に書けて言われてたよね。」

私「なんで怒られたか全然わかんないよ。」

唾「あつそういえばさ、あの3人にまだあつてないよね。」

那「あー、あの3人ね。クラスも違っちゃったしね。」

私「名前を言ってやれよっ!!！」

まあ、あの3人がでてきたらまた紹介します。

午後の授業もおわり、放課後なぜか教室にたまってるわたしたち

那「てゆうかさ、部活とかどうする？」

私「あみはまた生徒会やんの？」

唾「あー、でも生徒会ってランキング5位内じゃなきゃ入れないんだよ。」

私「へー、じゃあ中間テストおわんないとわかんないじゃんね。」
那「じゃあそれまで、ポイントでも貯めとく？」

唾「そうだね、テストの点数だけじゃつらいしね。」

じゃあ明日、掲示板のそこ行ってみようか。」

私&那「けーじばん？」

唾「二人とも、ゲームの説明とか見ないほうでしょ？」

那「よくわかったねー。まさかストーカー?!」

私「お前のストーカーしてなにが楽しいんだよ!ずっとゲームしてるだけだろ。」

唾「じゃあ丁寧に説明すると、この学校でどれだけイベントでポイントを

獲得できたかで、成績つくでしょ?

そのイベントってゆうのは、テストとか体育祭とかだけじゃなくて、

個人とか部活で主催することもできるの。

例えば、ゲームとかバスケとかで大会形式で3位までポイントが

もらえたりするって訳。

だからいっぱい参加したほうがいいの。
ちなみに、主催するには学校に企画書をだして許可をもらっ

たら

掲示板に貼るの。ポイントは学校側からもらえるから、主催者もお得てこと。」

私「すごいわかりやすいご説明ありがとうございます。」

那「他にもそうゆうのってあるの?」

唾「ケンカみたいのなんだけど、チームがチームに勝負を挑んでそれに勝てたら、一定のポイントがもらえるってゆうのぐら
いかな?」

私「さすがです。もうさすがとしか言えないです。」

唾「こんなのあたりまえだよー。」

那「そんなあたりまえ、あつてたまるかー!」

なゆの心のさけびがでた。

私「じゃあとりあえず、明日掲示板いこつか!」

第五ポイント（後書き）

あの3人がいつでてくるのかは、まだ誰もしないのであった。
（わたしも。）

第六ポイント

次の日の昼休みに、わたしたち3人はポイント稼ぎのために
掲示板のところに向かった。

私「そういえばあみ、思いついたんだけどさあ」

唾「なに？」

私「例えばさ、そのイベントつてのを3人で受けなくて

バラバラに他のイベントに参加するのってアリなの？」

唾「アリだよ。だから2人で受けるのもありだよ。」

でも、普通は3人で協力して勝つものなんだけど。」

那「そうなんだー。あつ!!.....」

唾「どうかした？」

那「今思ったんだけどさ、このチームで協力したら絶対負けない
？」

私&唾「あつっ!!」

唾「なえは運動はできるけど、勉強がまったくできなくて.....」

那「あみは勉強はできるけど、ゲームがまったくできなくて.....」

私「なゆはゲームはできるけど、運動がまったくできなくて.....」

」。

那「足ひっぱり合うことになるね……。」

私「でも、今日は一緒にやらない？」

初日なんだし、やる人以外はみてるってことでさー!!」

唾「そうだね、じゃあそれでいこうか。」

掲示板前につくと、人が結構いた。

ほとんどが上級生なんだけどね……。

唾「じゃあココは各自で選ぼうか。」

私&那「はぁーい」

結構たくさん企画書が、貼ってある。

バスケ対決、卓球対決、スブラ、ポケンバトル、
日本史クイズバトル、円周率暗記バトル?、花嫁修行バトル?!

普通のからなんかすごいのである……。

よく学校は許可したなあ、おい!!

那「なえー、まだー?」

私「あつごめん、じゃあ卓球勝負でいいや。

二人はなににしたの?」

唾「わたしは、英語の小テストってやつにしたよ。

テストとか勉強類は余裕だし。」

那「わたしは、マリオ ーットのバトルにした。
ゲーム機はいつも持ってるしね。」

私「よく先生にとりあげられないよねー。」

那「あー。馬島先生にみつかったけど、

「他の教師に見つかんなよ。めんどくせーから
っていわれてスルーされたよ。」

私「あいつはよく教員免許とれたな・・・。」

唾「二人とも早く教室戻るよー!!！」

那「あーい。次の授業なんだっけ？」

キーンコーンカーンコーン

唾「二人のせいで、鐘なっちゃったよ。

次の授業は、さっき話してた馬島先生だよ。」

私「まじでか・・・。」

唾「絶対走ったほうがいいよね・・・？」

那「負けるなあみ!!自分を信じるんだ!!！」

私「いや、お前もだからな?!！」

教室につきクラス中の視線がわたしに向けられる。

馬「オレの授業に遅れてくるとは、いい度胸してんじゃねーか。
ん？」

那「いや、これには深すぎて浅い訳があるんです!!」

馬「結局あせーじゃねーか。そんなにオレの近くで授業うけたいんだな」。

私「先生棒読みですよ?!近くってなに?」

唾「はあー」。

こうして、わたしたちは授業を最前列で勉強できましたとさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7070u/>

学生生活に必要なつつ込み

2011年12月25日01時45分発行